プールの授業で遅刻、教室に残った女子の下着を漁りオナニーする男子の話

学校のチャイムが遠くで鳴り響く中、理人は息を切らして校門を駆け抜けた。1時間目のプールの授業がすでに始まっている時間帯だった。昨夜、ゲームに熱中しすぎて夜更かししてしまった。またやってしまったと思いながら、校舎を全力疾走した。廊下は静まり返っていて、誰も通っていない。遠くからプールの水しぶきの音と生徒たちの歓声が、かすかに聞こえてくるだ

けだった。2組の男子である理人は、本来なら着替えのために1組の教室に移動するはず（1,2組合同で体育のため、1組が男子の更衣室、2組が女子の更衣室になる）だったが、もう授業も始まってるし大丈夫だろうと思い2組の教室のドアに手をかけた。

ドアをそっと開けると、やはり中は無人だった。机の上に散らばった水着のバッグ、タオル、脱ぎ捨てられた制服のシャツやスカート、ブラウス。空気には女の子たちの甘い香りや、微かな香水の残り香が濃く漂い、理人の鼻をくすぐった。理人はドアを静かに閉め、内側から

鍵をかけた。理人はこれはまたとないチャンスであることに気がつき、心臓の鼓動が速くなった。「こんなこと……絶対にダメだ。バレたら終わりだぞ」それでも、性欲と抑えきれない衝動が勝った。いつもクラスで遠くから見ているだけの女子たちの秘密に、触れられるかもしれないという誘惑。